

# 下着の色がジェンダーに対する自己認知や気分 に及ぼす影響 — 着衣認知の観点から —

伊東 秀真<sup>†</sup> 吉本 蒼史<sup>†</sup> 坂本 晶子<sup>‡</sup> 阪田 真己子<sup>†</sup>  
同志社大学文化情報学部<sup>†</sup> (株) ワコール人間科学研究所<sup>‡</sup>

## 1. はじめに

真っ白の服を着用することで気分がスッキリするなど、衣服の色が着用者の気分に影響を及ぼすことは、誰しも体感したことがある。衣服の色による影響は気分だけにとどまらず、認知や判断、行動といった高次な認知情報処理に影響を及ぼすとされ、近年「着衣認知 (encllothed cognition)」(Adam et al., 2012) の枠組みで研究が散見されるようになった。しかしながら、従前の着衣認知研究はすべて外部からその形状や色が視認できるアウトターウェアを対象として行われたものであった。

そこで本研究では、衣服の中でも外部から視認することができない「下着」に着目し、下着の色が着用者の気分や自己認知に影響を及ぼすかどうかを検証する。なお、本研究では自己認知の中でも、後天的に文化の中で獲得される「ジェンダーステレオタイプ」が着衣認知を引き起こすかを明らかにするため、ピンクや青といったジェンダーイメージの強い色の下着を用いた。

## 2. 方法

### 2.1 実験参加者

実験参加者は大学生 42 名 (男性 21 名, 女性 21 名, 平均年齢 20.1 歳,  $SD=1.18$ ) であった。実験では、各参加者に着用させる下着の色に応じて「ピンク」群、「青」群、「グレー (統制)」群に割り当てた。参加者を各群に割り当てる方法については後述する。

### 2.2 実験材料

本実験で実験参加者に着用させた下着は、男性はボクサーパンツ (ゲンゼ製 BODY WILD : BWY909A), 女性はブラジャーとショーツ (ワコール製ウンナナクール, ブラジャー : JB3710, ショーツ : JF2710) であった。いずれも、それぞれピンク, 青, グレーで無地のものを用意した。

### 2.3 実験手続き

実験に先立って、実験参加者には佐々木他 (2007) のジェンダー・アイデンティティ尺度に回答してもらい、ジェンダー・アイデンティティを測定した。その結果に基づき、実験群間のジェンダー・アイデ

ンティティが等質になるように参加者を「ピンク」群、「青」群、「グレー (統制)」群に男女各 7 名ずつ配置した (参加者間計画)。なお、本実験の参加者の中には生物学的な性別と、自認するジェンダーとの間に著しい乖離がある者は認められなかった。

実験では、下着着用前に日本語版 PANAS (佐藤他, 2001) による気分評定を行った後、下着を着用した状態で着用した下着に対する評価を行い、再度下着着用後の気分を評定するために日本語版 PANAS (佐藤他, 2001) への回答を求めた。その後、ジェンダーに対する潜在的自己認知を測る課題である IAT (Greenwald et al., 1998), 顕在的自己認知を測るジェンダー特性評定 (沼崎他, 2006) の順番で課題を行った。

## 3. 結果

各質問紙や課題で得られた得点を従属変数、性別 (男/女) × 着用した下着の色 (ピンク/青/グレー) を独立変数とした参加者間要因による 2 元配置分散分析を行った。

### 3.1 下着着用による気分の変化

日本語版 PANAS (佐藤他, 2001) のポジティブ感情 8 項目とネガティブ感情 8 項目の点数をそれぞれ加算し、下着着用後の得点から着用前の得点の差分を求め、その差分 (下着着用前をベースラインとした変化量) をポジティブ得点とネガティブ得点とした。

ポジティブ得点を従属変数とした 2 元配置分散分析を行った結果、性別要因および色要因の主効果はともに認められず、性別要因と色要因の交互作用 ( $F(2,36) = 8.643, p = .001, \eta_p^2 = .324$ ) が認められた (図 1 参照)。単純主効果検定の結果、女性はピンク、男性はグレーの下着を着用することでポジティ

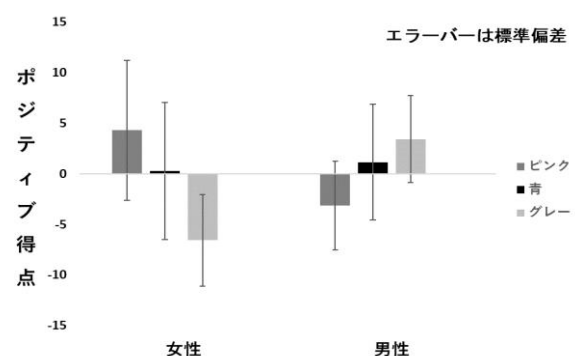


図 1 下着着用による気分変化

The effect of underwear color on gender self-awareness and mood -From the perspective of encllothed cognition-

<sup>†</sup> Faculty of Culture and Information Science, Doshisha University

<sup>‡</sup> Wacoal Human Science Research Center

ブ気分が上がり、女性はグレー、男性はピンクの下着を着用することでポジティブ気分が下がることがわかった。

ネガティブ得点を従属変数とした2元配置分散分析の結果、主効果、交互作用は認められなかった。

### 3.2 着用した下着の評価

着用した下着に対する評価項目（「下着の色の好悪」、「下着の形状の好悪」、「似合っているか」、「着心地」、「今後も着用したいか」）について5件法で得られた得点をそれぞれ従属変数とし、2元配置分散分析を行った。その結果、「下着の形状の好悪」、「着心地」の評価では性別・色要因の主効果および交互作用は認められなかった。そのため、各群において男女ともに形状や着心地といった機能面に対する評価に違いはないことがわかった。一方で、「下着の色の好悪」、「似合っているか」、「今後も着用したいか」の評価では性別と色による交互作用が認められた。単純主効果検定の結果、いずれの評価項目に対してもピンクの単純主効果が認められた。このことから、ピンクの下着に対して、女性は高く評価し快く受け入れる一方で、男性は低く評価し拒絶する傾向にあることがわかった。

### 3.3 下着着用によるジェンダー自己認知への影響

#### 3.3.1 潜在的ジェンダー自己認知

IATにより得られたデータについて、Greenwald et al. (2003) に基づいてD値を算出した。この値が大きいほど自己を女性らしいと認知していることを示す。

D値を従属変数とし、2元配置分散分析を行った。その結果、性別要因の主効果 ( $F(1,36) = 103.703, p < .001, \eta_p^2 = .742$ ) および色要因の主効果 ( $F(2,36) = 6.835, p = .003, \eta_p^2 = .275$ ) がともに認められた(図2参照)。性別要因と色要因の交互作用は認められなかった。

多重比較を行ったところ、女性と男性どちらにおいても、青、グレーよりもピンクの下着を着用した方が潜在的に自己を女性らしいと感じる程度が高くなることがわかった。

#### 3.3.2 顕在的ジェンダー自己認知

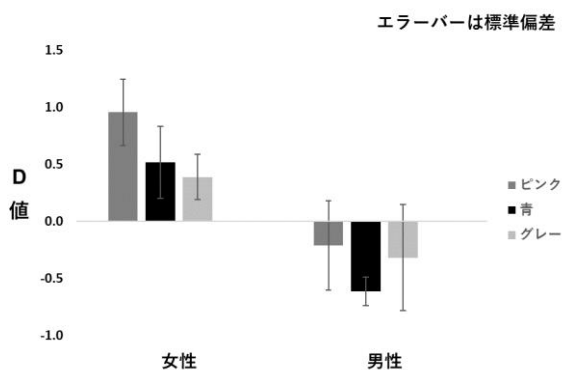


図2 D値の平均値：潜在的ジェンダー自己認知

ジェンダー特性評定の質問紙(沼崎他, 2006)の女性特性20項目と男性特性20項目の点数をそれぞれ加算し、女性特性得点と男性特性得点を算出した。その後、女性特性得点と男性特性得点の差分を算出し、自己ステレオタイプ得点とした。自己ステレオタイプ得点を従属変数として2元配置分散分析を行った結果、性別・色要因の主効果および交互作用は認められなかった。このことから、男女ともに着用する下着の色は顕在的なジェンダー自己認知に影響を及ぼさないことがわかった。

## 4. 考察

ピンクの下着着用で男女ともに自己を相対的に女性らしいと認知する程度が高まることがわかった。埴田他(2020)ではピンクのパーカーが着用者の女性らしさの認知を高めるとされた。本研究において視認不可能な下着であっても自己認知への影響が確かめられたことから、着衣認知は衣服を「着用する」という身体経験を経て、衣服が持つ象徴的意味合いを自己に取り入れたことによって生じることが示された。

着用する下着の色によって気分に変化が生じることもわかった。この結果は下着に心理的機能があることを実証的に示すものである。衣服の色による感情の影響は従前の研究でも見られるが(成瀬, 1998)、見えない衣服である下着の色が気分に影響することを実証した点は意義深いと考える。

また、ジェンダーイメージの強い色の下着着用が、顕在的なジェンダー自己認知には影響しないにもかかわらず、気分や潜在的なジェンダー自己認知に影響を及ぼした点は、ジェンダーレスになりつつある現在でも、潜在的なジェンダーバイアスが根強く存在することを示すものである。また、実験結果は、我々の潜在的な自己認知が、文化によって規定されるバイアスの影響を強く受けることを実証した点においても極めて興味深い。

## 参考文献

Adam et al. (2012). Enclothed cognition. *Journal of Experimental Social Psychology*, 48(4), 918-925

Greenwald et al. (1998). Measuring individual differences in implicit cognition: The implicit association test. *Journal of Personality and Social Psychology*, 74(6), 1464-1480

Greenwald et al. (2003). Understanding and using the implicit association test: I. An improved scoring algorithm. *Journal of Personality and Social Psychology*, 85(2), 197-216

埴田他(2020). ピンク・青の衣服がジェンダーに関連する自己認知と他者認知に及ぼす効果. *東京未来大学研究紀要*, 14, 141-151

成瀬(1998). 衣服の色彩が感情や行動に及ぼす影響. *日本生理人類学会誌*, 3(2), 41-44

沼崎他(2006). 恋愛は女性に対するステレオタイプ化や偏見を強めるのか?—異性愛プライムと平等主義的性役割観がキャリア女性と家庭女性に対する印象や評価に及ぼす効果—. *日本学術振興会科学研究費補助金研究成果報告書(研究代表者: 沼崎誠 2003-2005年度)*

佐々木他(2007). ジェンダー・アイデンティティ尺度の作成. *パーソナリティ研究*, 15(3), 251-265

佐藤他(2001). 日本語版 PANAS の作成. *性格心理学研究*, 9, 138-139